





# モンゴル襲来の世界史

伊藤 幸司

12世紀後半、モンゴル高原にチンギス・カンが誕生した。のちに、北方草原の遊牧地帯・東アジア世界・イスラム文化圏・ヨーロッパの一部というユーラシア大陸の広大な地域を支配するモンゴル帝国の物語が、彼から始まる。モンゴルは、1206年、国号を「大蒙古国」となり、第5代フビライ・カンの1271年には「大元大蒙古国」と改めた。いわゆる、「元」は略称である。

工作も入念におこなうのが侵攻のルーティーンであった。その結果、ロシアから東欧地域は、モンゴル軍によってたやすく席卷されてしまう。1241年4月11日、モンゴル軍はヨーロッパ最強とされたベラ4世ひきいるハンガリー軍をシャヨー河畔で撃破した。

一方、世界史として有名なのは、1241年4月9日に、シレジア公ヘンリク2世ひきいるポーランド・ドイ

ツ連合軍とモンゴル軍とが戦ったレグニツァの戦い(ワールシュタットの戦い)である。しかし、レグニツァの戦いは、同時代文献では確認できず、15世紀以降のヨーロッパで語り出されるという。おそらく、レグニツァの戦いはモンゴル軍の別動隊とポーランド・ドイツ軍との小規模な局地戦に過ぎなかった。しかし、その後のドイツ拡大主義のもとで都合よく喧伝されたため、必要以上に過大評価されてきたという。それゆえに、かつて世界史教科書で重要語句とされてきたワールシュタットの戦いは、現在、教科書から消えている。

## ユーラシア西方のモンゴル襲来

1234年、モンゴル帝国は中国華北地域を支配した金を南宋と挟撃して滅亡させた。新たな都としてカラ・コルムを建造したモンゴル帝国は、バトゥのロシア・東欧遠征をおこなう(図1)。この頃のモンゴル軍は、華北・中央アジア・イラン地域で学んだ各種兵器や攻城具・攻城戦術など、東西の軍事技術を獲得していた。さらに、遠征先の調査・略略・



図1：バトゥの西征(杉山,2008)より調製

地図中心 625号 目次【特集 蒙古襲来750年】		
モンゴル襲来の世界史	伊藤 幸司	2
蒙古襲来と地図	服部 英雄	8
博多と蒙古襲来	大庭 康時	12
元寇防壁—地形に見る国防の戦術—	大塚 紀宣	16
海底から甦る蒙古襲来	内野 義	20
九州北部の仏像に見る蒙古襲来—対馬と壱岐のことを中心に—	井形 進	26
【連載】		
《地図心中 復活版 34》 絵解き— 31 広大な自然がつくる感覚	高橋 美江	30
《地図づくり最前線 021》 地図のエンタメ化を目指す 「ディレクティングマップ」(1)	片岡 義明	32
《日本百名山が見える鉄道 見えた鉄道 18》 飯田線、中央西線から木曾駒ヶ岳、空木岳	清水 長正	34
《歴史舞台地図追跡 91》 江戸・東京をめぐる虚像と実像(其の廿壱)	谷口 榮	36
《地図を片手に大地を駆ける 85》 凹みで方角から身を守る 地理院地図でめぐる鬼門除け	崎村 悠子	38
《ベクター地歴地図孤軍奮闘記 58》 江戸落語地図 参	小島 豊美	40
《日本列島 1/20万 鶴の目鷹の目 31》 電子地形図 20万「大分」	小泉 武栄	42
《地図教育の道具箱 33》 2022年から高校で必修化した「地理総合」につながる中学校地理学習の実践【その1】	高圓 省三	44
《四方山話 11》 国土地理院のすべて・補遺—むかしこんなのもあった課 01 地理第一課 —昭和時代の土地条件調査—	津沢 正晴	46
新刊地形図案内 48 / 今月新刊の見どころ!・日本地図センター便り 49		
地図書窓・次号予告 50 / 編集後記・地図書窓 52		

月刊 **地図中心**

◆「地図中心」は毎月10日発行です◆

**1冊 880円 (税込)**

**地図倶楽部**

◆紙版と電子版のご購読会員

年間購読1年間 **12冊**

**プレミアム会員**

**6,600円 (税・送料込)**

プレミアム会員(シニア) 満65歳以上

**5,500円 (税・送料込)**

◆電子版のみのご購読会員(紙版は送付されません)

地図倶楽部会員	会費(税込)	入会資格
一般会員	5500円	なし
一般会員(シニア)	4400円	満65歳以上
学生会員	2200円	学生または18歳未満の方

地図倶楽部事務局  
map-club@jmc.or.jp 03-3485-5417

《表紙》上段左：22頁・図5：「蒙古襲来絵詞(模本)」(九州大学附属図書館所蔵)、上段右：22頁・図6：てつほう(松浦市教育委員会)、中段左：5頁・図7：日本のモンゴル襲来ルート(村井,1986)より調製)、中段右：6頁・図9：文永の役の博多(石井,2000)より調製)、下段：地理院地図(2024年9月取得)加筆

一方、「聖ヘドビギス図画伝」(1353年)には、ヘンリク2世がモンゴル軍に大敗した様子が描かれており、モンゴル軍の脅威がヨーロッパで共有されたことがわかる(図2)。

1258年2月、フレグの中東征西軍がアッバース朝のカリフがいるバクダードを陥落させた(図3)。ここに、約500年続いたアッバース朝は滅亡する。モンゴル軍はさらに西進し、パレスティナでエジプトのマムルーク朝の軍団と対峙したが、ここで大敗を喫した。結果的に、モンゴル軍の西進はマムルーク朝によって阻止され、アフリカ大陸に侵入できないどころか、東地中海沿岸に確保していた拠点までも失った。

### 高麗のモンゴル襲来と三別抄

高麗は、モンゴル軍の侵略を1231年から1259年にかけて6回も受けた(図4)。この間、高麗の国土はモンゴル軍によって蹂躪されたが、国王は都を開京(開城)から江華島に遷して抵抗した。江華島は、朝鮮半島との間に江華海峡があり、これがモンゴル軍の接近をはばんだのである。結果的に、国王や政府首脳は江華島という安全圏にたてこもり、高麗の民衆はモンゴル軍の

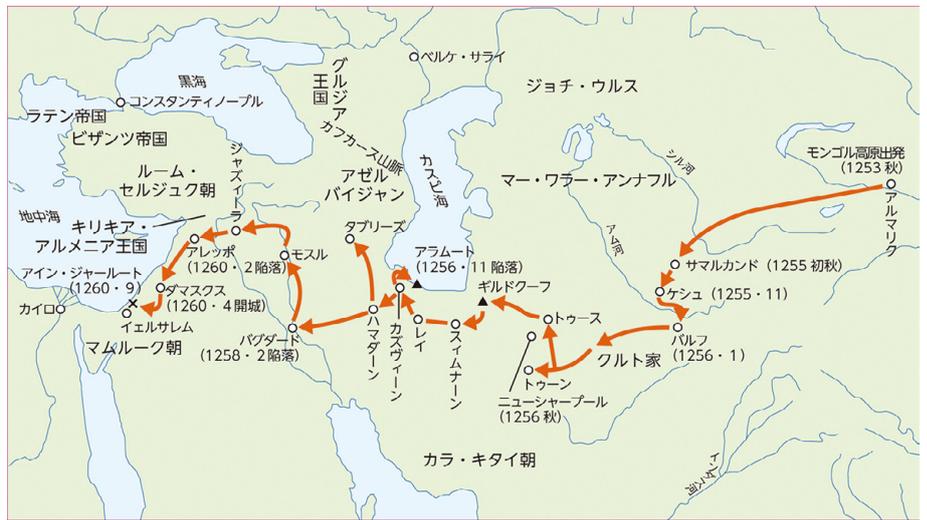


図3：フレグの西征(杉山,2008)より調製)

脅威にさらされ続けた。

第2次侵略では、慶尚北道大邱の符仁寺にあった高麗版大蔵經の板木(初彫版)がモンゴル軍の兵火で灰燼に帰した。大蔵經板は、11世紀前半に契丹の侵攻から仏教の力で国を防衛することを祈念して彫造されたものであり、結果的に契丹の侵入も阻止することができた。高麗は、かつての成功体験にすぎり、失われた大蔵經板を再彫し、再度、仏教の力でモンゴル帝国を撃退しようとした。こうして1236年からあしかけ16年を費やし、8万2千余枚におよぶ経板を復活させた。この大蔵經板(再彫版)は、現在も慶尚南道陝川の海印寺で保存され、世界記録遺産となっている。

しかし、仏教の加護はなく、高麗国王はモンゴル帝国と講和をした。高麗は、モンゴル帝国のゆるやかな支配を受ける属国となった。しかし、高麗側の抵抗はこれで終わらなかった。1270年、三別抄が反乱を起こしたのである。三別抄とは、正規軍から精強な者を選抜して編成された精鋭軍である。三別抄は、講和した政府を否定し、王族を擁立することで正統性を主張した。そして、抵抗の拠点を江華島から朝鮮半島南部の珍島に移した。珍島では、龍蔵山城に本拠を構えて、全羅道を制圧するなど一時的に隆盛を誇った。龍蔵山城は、港をとりかこむ山々の峰に防御線をはり、その麓には石組みで整備されたテラスが階段状に連なる構造となっており、突貫工事で造営されたとは考えられない(図5)。おそらく、高麗はモンゴル軍に抵抗しているときから、江華島のバックアップとして珍島の龍蔵山城を整備していたのであろう。それを、三別抄が利用したのである。

この間、三別抄は日本に対して高麗の名義で救援要請をした。日本には、3年前にもモンゴルに降伏した高麗から外交文書が送られていた。ともに高麗を名乗る外交文書でありながら、一方はモンゴルへの帰順を誘い、もう一方はモンゴルへの抵抗に共闘して欲しいとする。朝廷や鎌倉幕府は、2つの外交文書の内容に



図2：聖ヘドビギス図画伝(ゲティ美術館蔵)

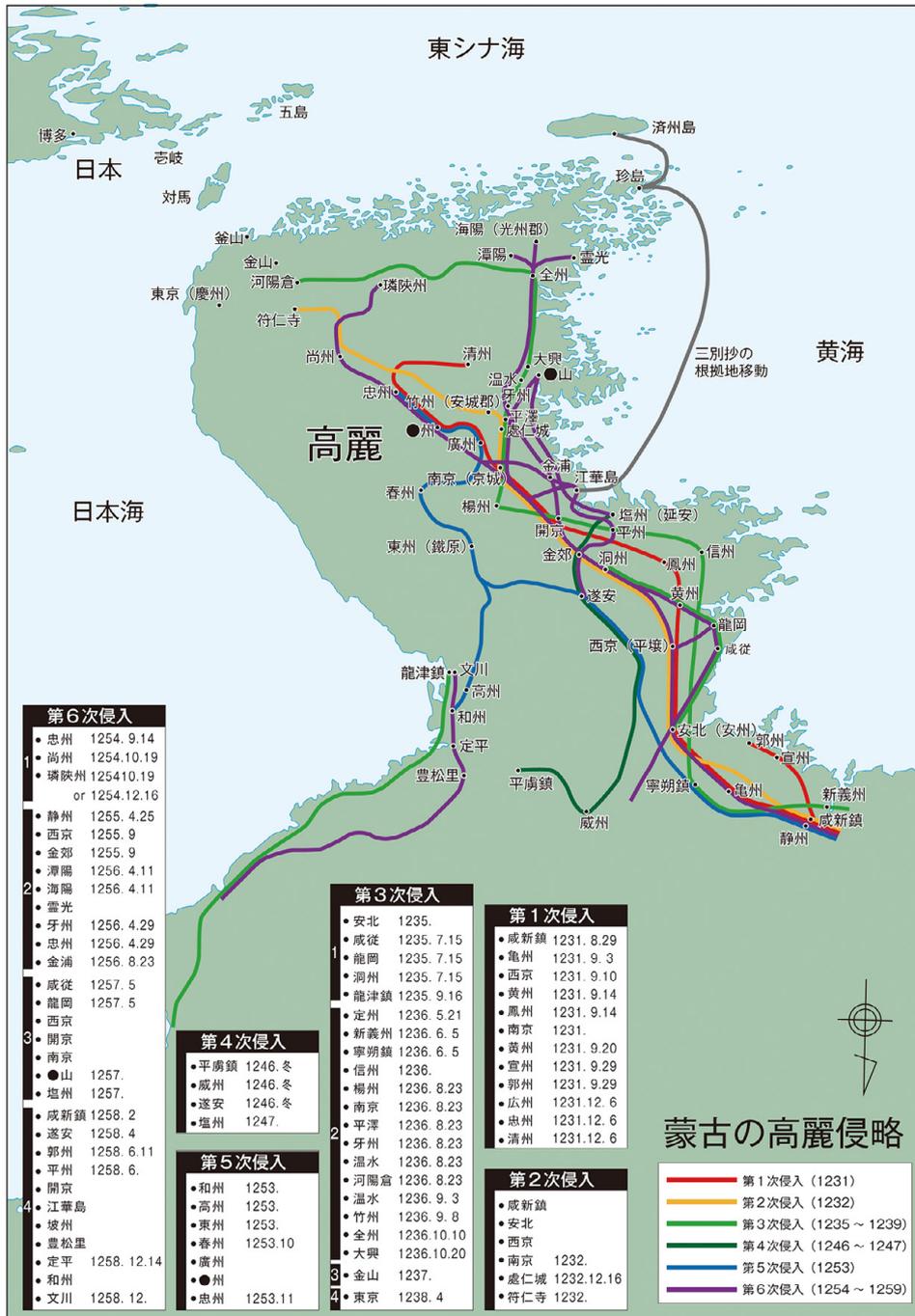


図4：高麗のモンゴル襲来（(村井,1986)より調製）



図5：龍藏山城跡

当惑しながらも、結局、三別抄の救援要請を無視した。これを、事なかれ主義と批判するのはたやすい。しかし、かつて百済を救援するために出兵し、白村江の戦い(663年)での大敗後、唐・新羅軍の侵略の可能性におびえ続けた古代日本の失敗を考えたら、鎌倉日本の対応もあながち悪くはない。

しかし、1271年5月に珍島は元・高麗軍によって攻略された。三別抄は、さらに南の海上にうかぶ済州島に逃げて、缸坡頭里城を拠点に抵抗を続けたが、1273年4月、ついに鎮圧された。三別抄の乱は、モンゴル帝国に降伏した高麗政府に反抗する反乱軍として否定的に評価されてきた。しかし、現在は、侵略者であるモンゴルに最後まで抵抗した義軍として位置づけられ、三別抄が滅んだ済州島には「抗蒙殉義碑」が建てられている。どこに正義の基準をおくかによって、歴史的評価が180度変わる良い例といえる。また、こうした朝鮮半島でのモンゴル抵抗活動が、結果的にモンゴル軍の日本遠征を遅らせることになった。

### ヴェトナムとチャンパのモンゴル襲来

モンゴル帝国の最大の目的は、ユーラシア東方の経済的中心地であり巨大な穀倉地帯をもった南宋の征服であった(図6)。ただし、南宋とモンゴル帝国との間には、淮河、漢水、長江などの大河川が横たわっており、南宋を攻略するためには水軍との連携が必要であった。モンゴル軍がなかなか南宋を攻略できなかった理由はここにある。しかし、水軍力が劣勢でありながら、モンゴル軍が6年の歳月をかけて南宋の最前線基地である襄陽を陥落させると、その後はあっけなく1279年に南宋は滅亡した。

現在のヴェトナムもモンゴル帝国



## 東大地理部の「地図深読み」散歩

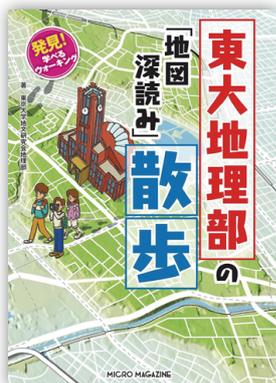
東京大学地文研究会地理部 著

本書は、東大地理部の活動の軸である「巡検」から、東京近郊で開催された16コースをセレクトして紹介しているものである。ルートマップには地理院地図を使用し、解説文とともに、巡検ルート中の写真つきの各ポイントを巡るように記載されている。各ポイントには詳細な説明があるため、実際におこなわれた巡検を追体験できるようになっている。

今回の16コースは地形・地質をメインテーマとしたものであり、河川・運河・湧水・暗渠などのアイコンで概要を説明し、色別標高図を使用することで地形を視覚的に理解させるなど、学術的な「巡検」をひろく一般向けの「散歩」として紹介している。

どのコースも4時間や6時間などとなっており、休日の散歩には都合よいだろうが、教育現場の先生方が授業内で活用するには難しいかもしれない。ぜひ先生方には学校のまわりを探検し、自身が見つけた地理的事象を生徒に紹介してもらいたいが、地理的事象を見つけることが難しいという先生方のヒントとなるのが本書である。各コー

スとも基本的には20個以上のポイントが示され、もちろんその地域特有の地理的事象もあるが、寺社や公園、橋なども多く取り上げられている。これらは「いつも見ているあの風景にあるもの」と感じるのではないだろうか。これらすべてにも歴史や背景があり、生徒に紹介する地理的事象としては十分といえる。東大地理部には、ストックがあるならば「産業編」や「交通編」あるいは「全国版」を出してほしい。それが全国の地理を専門とする教員の助けとなり、地理の将来を担う次世代の育成へとつながるだろう。充実した追体験ができる本書であり、駒場巡検の本文を引用して、「地理部



にも縁の深い日本地図センター（⑥、紙の地図の購入に利用）を経て」本書を片手に散歩したい。

（日本地図センター・地図研究所・竹澤史也）

マイクロマガジン社  
2024/3/12 発行  
A5判 128頁  
1760円（税込）

次号予告 2024年11月 通巻626号

毎月10日発行

地図と学ぶ月刊

## 地図中心 総特集 糸魚川-静岡構造線断層帯

フォッサ・マグナは本州中央部を南北方向に横断する大地溝帯。この西縁は糸魚川-静岡構造線で、地形・地質的にも明瞭に追跡され、東北日本弧と西南日本弧を分ける境界です。地質境界の糸魚川-静岡構造線は、島弧を2分する地質構造上で重要な断層。糸魚川~静岡の断層帯を地図で巡ります。



諏訪湖低地の地溝と周辺山地（2006年10月杉戸信彦撮影）

バックナンバーのご案内

地図中心

検索

「地図倶楽部」へのご入会をお待ちしています！ 03-3485-5417（事務局）

地図中心

2024-10 通巻625号

発行 2024年10月10日

発行所 一般財団法人日本地図センター  
〒153-8522

東京都目黒区青葉台4-9-6

電話 03-3485-8125

FAX 03-3485-5593

（月刊「地図中心」編集室）

メール chushin@jmc.or.jp

URL https://www.jmc.or.jp

©一般財団法人日本地図センター

定価 880円（税込）

印刷所 昭栄印刷株式会社

地図と学ぶ月刊誌



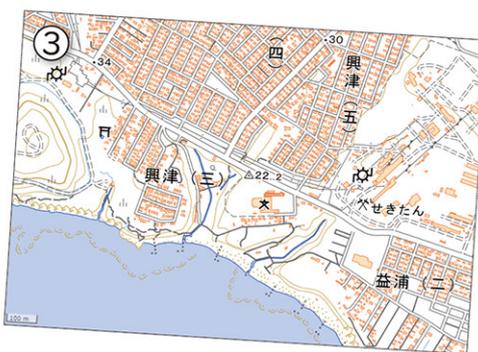
本誌の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、禁じられています。

# 地図地理検定

かこもん  
(基礎)

第39回出題  
問10  
正解率86.8%

次の写真は、カルスト地形の一種である福島県のおぶくま洞内部を撮影したものです。地理院地図①～④のうち、カルスト地形を示しているものを1つ選びなさい。



詳細を  
Check!



地図地理検定  
私も推薦します!

等高線や地図記号の意味  
を知れば、地図に描き込  
まれた無限の情報が理解  
できます。

地図大使  
石原良純さん



# 11月10日

検定実施日

2024年

日 日

申込締切：10月下旬 (詳細はウェブサイトアクセス!!)